伊藤左千夫 人脈考（上）

貞光　威

はじめに

伊藤左千夫の文学的な業績を考えるとき、「ほろびの光」などの歌を詠み、「野菊の墓」などの小説や「叫びの説」などの歌論をいろいろと書いたことがそれとしてまず考えられるけれども、それと同時に「馬酔木」や「アララギ」を主宰して、斎藤茂吉・島木赤彦・古泉千樫・土屋文明など多くの若い歌人たちに親しく接し、教え導いた業績も忘れることはできない。アララギの諸歌人の活躍は、大正・昭和に至って隆盛期を迎えるが、これも左千夫の新人育成の努力が、この頃になって実を結んだといえるし、彼の歌人としての人間尊重が豊かな実りをもたらしたともいえる。

見方をかえれば、人間としての左千夫は、敵も多く作りはしたが、本来的に人間好きで、人を信じ、情熱を傾けて門下の指導に当たった。そのことの、当然といえば当然の結果であり、この点は、己を持すること固く潔癖で、敵も作らなかったが、門下というものもほとんど持たなかった長塚節と対照的である。

本稿はそのような左千夫の幅の広い人間関係を把握する一つの手がかりとして、左千夫と交渉のあった文学者・文人たちの人物について簡単な解説を加えた上で、左千夫とのかかわりを述べたものである。

体裁としては、それぞれの人物について、〔概括〕〔人物〕〔作品〕の三項目を設け、まず〔概括〕の項で、その人物と左千夫とのつながりを要約して述べ、次の〔人物〕の項で経歴を紹介したあとで左千夫との関係をできるだけ詳細に述べ、最後に、▼印の下にその人物の特色ある短歌を一首だけ添えた。なお、人名の配列は五十音順とした。

赤木格堂（あかぎ　かくどう）

〔概括〕　子規門、根岸短歌会の歌友。入門は左千夫より

早く、左千夫は「日本」紙上で格堂の短歌を見て感服、根岸短歌会にはいる決意をしたという。

〔概括〕　歌人・俳人・政治家。明一二(一八七九)・七・二七～昭一三(一九四八)・一二・一。岡山県児島郡小串村生まれ。本名、亀一。東京専門学校(明治三十四年に早稲田大学に昇格)在学中の三十二年から正岡子規に俳句や短歌の指導を受けるようになり、歌会には三十二年九月の子規庵歌会から出席した。真率平明な歌風で子規の評価も高く、病気の重い子規にかわって雑誌「大帝国」「国力」の短歌欄の選や「日本附録週報」の代選を任されるなど歌才を嘱望された。子規の依頼で平賀元義の歌を集めて送り、子規が明治三十四年に「墨汁一滴」で元義を万葉調歌人として再評価するのを助けた。このように子規の信任が厚かったが、子規の没後は文学から遠ざかり、パリ留学から帰ってのちは政治や新聞の仕事に力を注ぎ、衆議院議員、九州日報主筆、山陽日報主筆などを勤めた。格堂の書いた「先師の晩年」(「日本及日本人」昭3・9)によれば、左千夫は明治三十二年十二月十六日の新聞「日本」に載った格堂作の「池ぞひに道はあれども道を遠み氷の上を渡らんと思ふ」を読み、この一首に感服して、根岸短歌会に加わる決意をした旨を格堂に語ったという。二十一歳の学生だった格堂の歌に、これまでの歌にない新鮮さを発見したものであろう。格堂が左千夫の思い出を綴った文章に「牛飼左千夫」(「アララギ」大2・11)がある。

▼鉢植の菜種の花の咲きそめて此頃春の日永くなりぬ
―「日本」明33・3・15―

朝倉天易児(あさくら　ていじ)

〔概括〕　左千夫に私淑して「馬酔木」に歌を投じた。左千夫は天易児の主宰する「甲矢」の選歌を担当し、歌や歌論も寄せた。

〔人物〕　歌人。俳人。明治一二(一八七九)・九・一五～昭和二五(一九五〇)・一一・一八。豊橋の人。本名、貞二。別号、天易児(汀児とも書いた)。俳号、天易。家は蚕系業を営み、若い頃から村の収入役、産業組合組合長などを勤めた。左千夫を慕って「馬酔木」によく歌を投じ、明治三十七年九月に子規の系統を引く短歌・俳句雑誌「甲矢」を豊橋から創刊した。この雑誌は四十年四月の第三巻八号まで続き、三十二冊刊行されたが、その編集はいつも天易児が行なって左千夫や「馬酔木」に好意を示した。左千夫は「甲矢」の選歌を担当するとともに選者詠を載せ、歌論「上田秋成の歌」を同誌に発表している。昭和五年五月、句誌「うしほ」を創刊した。歌風は的確な写生を基本としながら豊かな抒情味を漂わしている。

▼むれ遊ぶ池の緋鯉の影透きてゆらぐや白き沢瀉(おもだか)の花
―「馬酔木」明36・11―

浅野梨郷(あさの　りきょう)

〔概括〕　「アララギ」が東京の左千夫宅を発行所として刊行されるようになった二巻一号(明治四十二年九月)か

ら同誌に参加、左千夫に親しく歌の指導を受けた名古屋の歌人。

〔人物〕 歌人。明治二二(一八八九)・一一・一～昭和五四(一九七九)・八・三〇。名古屋市生まれ。本名、利郷。東京外語卒。鉄道省事務官、日本交通公社主事、名古屋市観光課長などを勤めた。中学時代に依田秋圃から歌の手ほどきを受け、東京外語時代の明治四十二年に左千夫の門に入り、「アララギ」が東京の左千夫宅から刊行されることになった明治四十二月九月発行の二巻一号から熱心に出詠した。左千夫は同誌二巻四号(明42・12)の「消息」欄で「利郷君は名古屋藩士の名古屋生にて純粋なる都人に候、而して一点才気を弄せず毫末浮華を見ず、素朴も無邪気も又自のづから地方人と異なる処甚だ面白く、思想感情はどこまでも都人にして趣味は淡素純朴なるが嬉しく候」とこの年の進歩いちじるしい者として賞賛した。東京歌会を通じて憲吉・茂吉・文明らとも交遊があった。大正二年、左千夫の死に逢い、「アララギ」から遠ざかった。大正十年、秋圃らと「歌集日本」を創刊、「日光」「橄欖」にも参加、昭和六年三月から「武都紀」を主宰して晩年に至った。歌は左千夫の批評のように写生を基調とした堅実でおおらかな歌風である。歌集に『梨郷歌集』(昭6・7)、『豊旗雲』(昭31・9)がある。

▼ふるさとゆ来し小包を開く間のうれし心はたとへがたしも

―「アララギ」明42・9―

石川啄木(いしかわ たくぼく)

〔概括〕 森鷗外宅で催された観潮楼歌会で数回顔を合わせた。晩年の左千夫は啄木の『悲しき玩具』に興味を示し、その影響の認められる作がある。

〔人物〕 歌人・詩人・小説家・評論家。明治一九(一八八六)・二・二〇～明四五(一九一二)・四・一三。岩手県生まれ。本名、一。盛岡尋常中学校を中退、与謝野鉄幹・晶子夫妻に師事しようと上京し二十歳で詩集『あこがれ』(小田島書房 明38・5)を刊行した。郷里の渋民尋常高等小学校の代用教員、北海道の地方新聞の記者を経て、明治四十二年朝日新聞校正係となった。歌集に『一握の砂』(東雲堂書店 明43・12)、『悲しき玩具』(東雲堂書店 明45・6)、小説に「雲は天才である」、評論に「時代閉塞の現状」などがあり、時代の浪漫主義、自然主義の強い影響を受けたのち、明治四十三年の大逆事件を契機として社会主義への関心を深めた。左千夫と啄木との接触は森鷗外が主催した観潮楼歌会の席上であって、二人は明治四十一年五月二日、七月四日、九月五日、十月三日、十一月七日、四十二年一月九日の六回顔を合わせていると考えられる。啄木は左千夫と初対面の印象を四十一年五月二日の日記に「左千夫は所謂根岸派の歌人で、近頃一種の野趣ある小説を書き出したが、風采はマルデ田舎の村長様みたいで、随分ソソッカしい男だ。年は三十七八にもならう。」と書いている。その年四十五歳であった年齢をのぞけば、啄木は左千夫をか

なり的確にとらえているといえよう。一方の左千夫は、「石川君とは鷗外博士宅に毎月歌会のあつた頃、幾度も逢つた筈である。処が八度の近眼鏡を二つ掛ける吾輩は、とうとう其顔を能く見覚える事も出来なくて終つた。」と故意に無視をしたともとれる言い方をしている。しかし、左千夫は啄木の歌から強い印象を受けたらしく、大正元年八月発行の「アララギ」に歌論「『悲しき玩具』を読む」を発表、その中で「猫を飼はば、／その猫がまた争ひの種となるらん、／かなしきわが家。」などの歌を引いて、「吾輩は茲で、アララギ諸同人に忠告を試みたい、我諸同人の歌は、概して形式を重じ過ぎた粉飾の過ぎた弊が多いやうであるから、石川君の歌などの、とんと形式に拘泥しない、粉飾の少しもないやうな歌風を見て、自己省察の料に供すべきである。」と述べている。このころ門下の斎藤茂吉や島木赤彦など「アララギ」の若い世代は、時代の影響をうけて象徴的な歌風への接近を見せ、歌に「叫び」を重視する左千夫とは大きな隔たりを見せていたので、左千夫は門下の茂吉や赤彦らよりも、むしろ啄木の歌に親しみを感じたと思われる。左千夫が大正二年二月発行の「アララギ」に発表した「静なる家」八首中の「物忘れしたる思ひに心づきぬ汽車工場は今日休みなり」などの歌には作者の新しい狙いが感じられ、啄木の言う「忙しい生活の間に心に浮んでは消えて行く刹那々々の感じを愛惜する」（「歌のいろいろ」）歌風への接近がうかがえる。啄木の一周忌の追悼会が東京浅草の等光寺（土岐哀果の生家）で催されたとき、左千夫は金田一京助、与謝野鉄幹、平出修とともにその席で談話を発表している。

▼　いつしか夏となれりけり。
　　やみあがりの目にこゝろよき
　　雨の明るさ！
　　―『悲しき玩具』明45・6―

石原純（いしはら　あつし）

〔概括〕　左千夫に師事した「馬酔木」「アララギ」の主要同人。明治四十二年「アララギ」が東京から発刊された際にはその編集の中心となり活躍した。

〔人物〕　歌人。理論物理学者。明治一四（一八八一）・一・一五～昭和二二（一九四七）・一・一九。東京市本郷区（現、文京区）生まれ。純は本名で、歌の方では阿都志とも書いている。明治四十四年から大正十年まで東北大学で教鞭をとった。その間、明治四十五年から大正三年までドイツに留学。大正十年、歌人原阿佐緒との恋愛が社会的批判を招き教授の職を辞し、以後は自然科学方面の著述、編纂にたずさわって、アインシュタインの相対性理論の祖述者として名をなした。一高時代、正岡子規の歌論に触発され新聞「日本」の鈴木葯房選の募集歌に歌を投じ、明治三十六年に「馬酔木」が創刊されると二号から歌を出して左千夫に師事した。四十一年、同誌の後継誌「アララギ」の創刊とともにこれに参加し、翌年、発行所を東京に移して

新しく出発することになった際には斎藤茂吉・古泉千樫ら新進の同人たちの中心として大きな推進力となった。歌集『靉日』を大正十一年五月にアルス社から刊行して「アララギ」叢書第十四編としたが、十三年に北原白秋らが雑誌「日光」を刊行すると古泉千樫・釈迢空らとこれに加わり「アララギ」を去った。その前後から口語自由律短歌に転じ、「渦状星雲」「三角洲」「短歌創造」等に関係したが理論活動のわりにその実作は成功したといいにくい。純は「馬酔木」初期以来の「アララギ」の先進であるが、歌集『靉日』は都会的な感覚を放つ新鮮味のあるもので「アララギ」派歌人の作品としては異色のものである。

▼地をかへて住みなれぬ家にさみだれのいく日も降れば
栗の花過ぎぬ　—「アララギ」明44・9—

伊藤並根（いとう　なみね）

〔概括〕　左千夫と同じ東京本所区で牛乳搾取業を営んだ先輩。左千夫が歌を詠み始めたのは並根の影響である。左千夫は並根から茶の湯の手ほどきも受けた。

〔人物〕　歌人。牛乳搾取業。天保六（一八三六）・六・二九～大正三（一九一四）・一二・三一。名古屋市西区本重町の常瑞寺に生まれる。黒部氏。幼名、邦三郎。嘉永六年、十九歳のとき江戸に行き浅草梅応院の住職となったが、二十五歳で還俗して伊藤聴雨の養子となる。明治に入り東京府の役人をしていたが二十一年七月、本所区に得生舎と号して牛乳搾取業を開業、四十三年ごろ、瀧ノ川字三軒屋に移り、大正三年に八十歳で没。左千夫がデボン舎と号して開業したのは明治二十二年四月で、並根の開業より九ケ月遅れている。並根は左千夫より二十九歳年長であるが、二人は同業ということで二十六年に知り合い、左千夫は並根から茶の湯を学ぶとともに並根が桂園派風の歌を詠んだところから歌の上でも楽しみをともにするに至った。二十八年三月五日に二人は蒲田の八景園に探梅に出掛けそれぞれ九首ずつ歌を詠んだのが並根の筆になる「蒲田観梅の記」に収められ、同年四月には共に京都に遊んでいる。二十九年の並根の詠草手記に「春そのぬしのおのれをまつといふ歌の返し菊の画形の短冊なれば」の詞書で並根の「われをまつときくぞ嬉しき新摘のう治のこのめをこのむ身なれば」という一首が見える。これから二人は茶や歌の風流の友として親しんだことが知られる。左千夫が子規に入門してからはともに歌を作るということはまれになったものと見られるが、並根の書いたものの中に「訪無一塵居」と題する漢詩があり、「閑室呼云無一塵　招吾紅葉萩花辰　寒泉古鼎主人癖　啜茗爐辺話旧新」と詠じている。「無一塵居」というのは左千夫の舎号で子規が左千夫のために「無一塵」の扁額を書いてから呼ぶようになった。してみると、左千夫の子規入門後も交際が続いたことが知られる。並根の書いたものによると、三十六年二月四日に左千夫は並根宅の茶の湯の会に出席、三十九年五月二十一日には左千夫は自宅で茶の湯の会を開き、並根・式守蝸牛・瀬川昌耆を招い

ており、並根が四十三年に瀧ノ川に転居するまでは茶の湯を通じての往来がつづいていたと考えられる。左千夫が死んだとき並根は「大正二年七月三十日、旧友伊藤左千雄氏の身まかれるを八月一日の新聞上に掲載しあるを見て」の詞書で「あなかなしあないたましや送らるる人に後れて残る此身は」と追悼の歌を詠んでいる。

▼のどかなる霞と共に立出でて蒲田の梅をいざ尋ねみん

―「蒲田観梅の記」明28・3・5―

上原三川（うえはら　さんせん）

〔概括〕　左千夫に私淑した信州の歌人胡桃沢勘内・望月光らの歌の師。左千夫は三川を病床に見舞い、遺稿を新聞「日本」に掲載した。

〔人物〕　俳人。慶応二（一八六六）・二・八～明治四〇（一九〇七）・六・二五。信州生まれ。本名、良三郎。長野師範を出て教員生活を送った。胸を病み東京の北里病院に入院加療中に句作を試み、のち正岡子規と親しむに至った。病中に直野碧玲瓏（なおのへきれいろう）と共編で刊行した『新俳句』（民友社　明31・3）は子規の校閲を経た日本派の最初のアンソロジーである。晩年は松本に住んで俳句のほか短歌も指導した。胡桃沢勘内・望月光は三川の門より出た。明治三十九年八月に左千夫が第二回の信州入りをして松本を訪れた折には、浅間温泉で病を養っていた三川を見舞っている。翌年六月二十五日に三川は病没したが、左千夫は胡桃沢勘内らが送った三川の前年に詠じた短歌を新聞「日本」の左千夫選の選歌欄に「三川遺稿短歌」と題し序文を付して七月二十四日、二十六日、二十七日の三回にわたって計三十四首を連載した。左千夫は明治四十二年八月、七回目の信州入りをした。二十二日に地方の同人たちに迎えられて浅間温泉小柳の湯に浴した左千夫は、三年前ここを訪れた折に病気を見舞い、翌年世を去った三川を思って「世にありて一度逢ひし君と云へど吾が胸の門に君は消えずも」他一首を詠じ、「信州数日」（「アララギ」一の二　明42・10）に収めている。

▼相見なばよき人ならし歌よみの牛飼左千夫炭焼節

―「日本」明40・7・27―

塩谷鵜平（えんや　うへい）

〔概括〕　岐阜市鏡島の大地主。鵜平が創刊した「鵜川」に左千夫は歌や歌論を載せ、選歌を担当、熱心に指導した。左千夫、節、碧梧桐などがここを訪れた。広義の日本派に属し、子規門下の人々との交わりは濃い。

〔人物〕　新傾向俳人として活躍したほか写生文、短歌も試みた。明治一〇（一八七七）・五・三〇～昭一五（一九四〇）・一二・八。岐阜県稲葉郡鏡島村（現、岐阜市）江崎の素封家に生まれた。本名、熊蔵、のち宇平を襲名。別号は華園、のち鵜平と改めた。東京専門学校（現、早稲田大学）邦語政治科卒業。河東碧梧桐に心服し、新傾向句時代にその主要俳人として活躍した。明治三十二年から新聞「日本」に投句を始めた鵜平は三十六年二月に根岸系の短歌・俳句雑誌として「鵜川」を創刊。これは、根岸短歌会

の機関誌として東京から「馬酔木」が発刊になる四ケ月前のことで、伊藤左千夫・長塚節・岡麓・蕨真らが毎号歌を載せている。左千夫の歌論「根本的相違」（明36・2）、「連作乃歌」（明34・4）、「歌話漫草」（明37・9）は本誌に掲載されたもの。子規生存中に成立した根岸派最初の地方歌会であるところの奥島欣人・伊藤直郎らによる名古屋短歌会の詠草も収めている。明治三十七年十月発行の二巻五号まで、十七冊を出して終刊。大正二年から没年まで個人誌「土」を刊行した。昭和二年には新傾向の俳句雑誌「俳藪」を創刊し、門下の指導に尽くした。左千夫や節らの歌人、碧梧桐や句仏などの俳人等、塩谷家で歓待を受けた者が多い。

▼浮寝鳥浮べるなべに冬川の小紅（をべに）の渡見（わたし）れどあかなく

―「馬酔木」明38・4―

岡麓（おか　ふもと）

〔概括〕　明治三十一年に桐ノ舎桂子の歌会で左千夫を知った。香取秀真らとともに三十二年には根岸短歌会の創立に関与し、三十六年には左千夫と協力して「馬酔木」を創刊した。

〔人物〕　歌人。書家。明治一〇（一八七七）・三・三～昭和二十六（一九五一）・九・七。東京市本郷区金助町（通称、湯島傘谷）に暮府の御典医、岡良節の三男として出生。本名、三郎。書号、三谷。俳号、傘谷。幼少の頃から書と和歌を習い、明治二十五年、十六歳の時府立一中を中退して大八洲学校に入り、講師佐佐木信綱の指導を受けるとともに、ここで香取秀真を知った。同年、宝田通文の精義塾に入って国語漢文、和歌等を学び、また書家の多田親愛の門に入り、書を学んだ。二十九年、秀真・桃沢茂春らと雑誌「うた」を発刊。三十一年には桐の舎桂子の塾の歌会で左千夫を知った。麓と秀真とは鶯蛙吟社の「詞林」の編集員をしていたが、同誌が三十二年一月に「心の華」に合併すると二人は「心の華」の編集員となった。同年、秀真の歌三十二首に、麓・大橋文之・山本鹿洲の三人の歌をつがえて、三十二番歌合二冊を作り、一冊は佐佐木信綱、もう一冊は前年に新聞「日本」に歌論「歌よみに与ふる書」、短歌「百中十首」を発表した正岡子規に歌の判を頼むことになり、鹿洲が使いになってゆくと子規は快諾した。判をした冊子の返送を受けてのち、麓と秀真とは判をしてもらった礼を言いに一月二十日ごろ根岸の子規の家を訪れたが、その月に二人は入門した。これが機縁となって前年三月に俳人たちにより一度開かれたまま中絶していた歌会を再び催すことになり、三十二年三月十四日　歌人の参加した最初の歌会が子規庵で開かれ、子規・麓・秀真・鹿洲・木村芳雨・黒井恕堂の六名が参加した。後年、「根岸短歌会」と呼ばれるようになった歌会はここにその第一歩を記し、麓らは根岸短歌会の創設に深くかかわった。子規の没後も、三十六年には「馬酔木」の創刊に際して発起人として名を連ねたが、その後は次第に作歌から遠ざかった。明治三十

九年に麓は出版社彩雲閣を開き、『平賀元義歌集』ほかを出版し、雑誌「趣味」を発行した。同誌の二巻三号（明40・3）から二巻七号までには、左千夫の選により根岸派の歌人たちの作品が掲載された。左千夫自身も短歌の「短歌瑤絡」十首、「アンナ、シャエファル嬢に寄す」十二首、「青葉の旅」五首、小品の「或ゆふべ」、評論「写生文論」などを寄稿したが四十二年に廃業、以後は書家として立ち、聖心女子学院等で指導にあたった。左千夫没後の大正五年、「馬酔木」の後継誌「アララギ」に参加して作歌に復活、選者にもなり終生作歌をつづけた。歌集に『庭苔』（大15）『小笹生』（昭12）、『雪間草』（昭27）など七冊がある。はじめは平淡の中に情趣を漂わす歌風であったが、次第に「アララギ」の現実的歌風を身につけるに至り、特に晩年に太平洋戦争の戦火を避けて長野県に疎開してからの作には悲痛に徹した秀作が多い。昭和二十四年、日本芸術院会員に推された。「馬酔木」創刊には発起人として名を連ね、資金の面でも左千夫以上に多くを負担したのに、やがて次第に遠ざかった。それは、彼よりあとから子規に入門した左千夫が、「馬酔木」の主宰者だといってともすると独善的な態度をとることもあったようで、麓はこれを快く思わなかったためであろう。

▼呉竹の根岸はこひし川添の家毎に咲けり秋海棠（しうかいだう）の花

—「馬酔木」明37・11—

岡田撫琴（おかだ　ぶきん）

〔概括〕　「馬酔木」に歌を寄せた三河の歌人。彼の編集する新聞に左千夫は歌を寄せた。

〔人物〕　歌人。俳人。明治六（一八七三）～昭和二五（一九四〇）・五・一一。愛知県岡崎市生まれ。千賀家に生まれたが幼いとき醤油醸造業を営む岡田家の養子となった。本名、太郎次郎。早稲田大学卒。豊橋から発行されていた「甲矢」に作品を寄せ、同誌の三巻五号（明40・1）の裏表紙には撫琴の筆になる左千夫の肖像が載っている。左千夫は撫琴の家を何度か訪れているのでその折に描いたものであろう。撫琴は明治末年に「三河商工新報」、大正十三年から昭和十年までは「三河日報」という新聞を発行した。「馬酔木」の新刊紹介欄には「三河商工新報」の名が見えるから、毎月三回発行のこの新聞を毎号寄贈されていたらしい。左千夫はこの新聞に作歌を何度か載せたようで、この新聞の現物が発見されると左千夫の作品が新しく出てくる可能性がある。明治三十八年作「静といふ題にて」六首は「馬酔木」三の二（明39・2）にも載ったが、三十八年十二月二十五日付に撫琴宛に送った歌稿が現存している。撫琴は俳句にも活躍した。

▼朝まだき馬追うて行く峠路や谷の若葉に靄（もや）晴れ渡る

—「馬酔木」明39・7—

奥島欣人（おくしま　きんじん）

〔概括〕　根岸派の地方短歌会のうちで最も早く「名古屋短歌会」を創設した名古屋の歌人。「鵜川」の短歌欄も担

当した。長塚節を尊敬し、左千夫とはそりの合わぬことが多かった。

〔人物〕　歌人。養蜂家。明治六（一八七三）・八・一八～昭和八（一九三三）・九・二四。名古屋市生まれ。本名、欣次郎。号の欣人はヨシトとも読む。別号、暁雨。大阪毎日新聞社に勤めたが、明治四十年に退社して名古屋市東区長塀町で養蜂業を営み、そのかたわら「日本養蜂雑誌」を発行した。明治三十三年、左千夫は「心の花」の一月号に「奥島暁雨君之歌」という一文を寄せ、「海」という雑誌に載った欣人の歌について、「一渡見終つて予は驚喜の情禁じ難きものがある」「斯道のために如斯佳作は『心の華』にも少し掲げて貰ひたい」と述べて、欣人の短歌十三首を紹介している。この年、佐佐木信綱の「心の花」に入会、三十五年には伊藤直郎・黒部不関坊らと名古屋短歌会を創設した。地方における根岸派の短歌会としては最初のものである。設立にあたって子規庵における歌会の運営の方法を欣人から尋ねられた左千夫は、手紙で詳しく知らせ、節とともに詠草の選評を担当した。三十六年、欣人は岐阜の塩谷鵜平が根岸系の短歌俳句雑誌「鵜川」を創刊するのを助け、短歌欄を担当し、左千夫・節・岡麓・香取秀真らの作品を掲載した。欣人は「馬酔木」には三十八年二月発行の八号から出詠したが、その歌風は淡々とした写生で、左千夫の標準とは隔りがあった。そのため欣人は「鵜川」（明37・7）に「馬酔木と謂はず、鵜川と謂はず、此ごろの歌を見るに、いづれも面白からぬ作のみにて、飽たらぬふしこそ多けれ」という前書で「蛆むしの、うごめく如き、ぬた人の、吐きつるぬたは、魚のぬたにしかず」などの歌を詠んで載せた。「ぬた人」というのは左千夫を暗に指したものと見てまちがいはないであろう。これを読んだ左千夫は翌月号の「鵜川」（明37・8）に「噎笑太具利与四徒鼻麿作歌」（たぐりのよしとはなまろをあざわらひてよめる）という題で「他ぬたを臭しとを云へ自がぬたの臭みわかずかおぞの醜鼻」など八首を詠んで載せた。欣人は鼻が赤かったらしい。これに対して欣人は「鵜川」終刊号（明37・11）で、「鵜川」歌壇に対する節の貢献をたたえた上で、「馬酔木」のことを「根岸派の馬酔木ではない、左千夫の馬酔木であると断言する」と、この雑誌が左千夫に毒されている旨を述べ、今後、節がもっと誌上で活躍するよう期待することを記した。すると左千夫は「見憎さよ欣人天狗の鼻の蠅」（明37・7・7付　赤彦宛書簡）と罵倒するという具合であった。このように欣人は左千夫と相容れないところが多かったので、「アララギ」二巻一号（明42・9）を最後に去り、大正十年には、依田秋圃らと「歌集日本」を創刊した。「鵜川」は歌の方では根岸派の中で最も早く、「馬酔木」よりも先に創刊された雑誌であったので、多くの子規門の歌人たちが作品を寄せていたのに、明治三十七年十一月、二巻五号を限りにあわただしく終刊した。これには、負けん気の強い左千夫と欣人の二人が互いに激しい

罵倒のことばを「鵜川」誌上に載せて、この雑誌が喧嘩の場のようになったので、発行人である塩谷鵜平が困惑して、雑誌継続の意欲を失ったことが大きな原因になっていると思われる。近ごろ『奥島欣人遺稿集』（昭59　短歌研究社）が刊行された。

▼向ひ見る養老の山のむらもみぢ紅葉（もみぢ）の上に夕靄（ゆふもや）うごけり
―「馬酔木」明37・2―

香取秀真（かとり　ほつま）

〔概括〕　岡麓らとともに根岸短歌会の創立にかかわり、左千夫と協力して「馬酔木」を創刊した。

〔人物〕　歌人。鋳金家。東京美術学校教授。明七（一八七四）・一・一～昭和二九（一九五四）・一・三一。千葉県生まれ。本名、秀治郎。東京美術学校卒。昭和二十四年、帝国美術院会員に推された。初め大八洲学校で岡麓を知り、麓や桃沢茂春らと歌誌「うた」を発刊した。秀真・麓の二人は鶯蛙吟社の「詞林」の編集員をしていたが、同誌が三十二年一月に「心の華」に合併すると二人は同誌の編集員となった。同年、秀真の歌三十二首に麓ほか三人の歌を合わせて三十二番歌合を作り、佐佐木信綱と正岡子規に判を乞うたのがきっかけで子規の門に入り、三十二年三月十四日に子規庵で開かれた歌人による第一回の歌会に出席するなど根岸短歌会の創立にかかわった。子規の没後も、三十六年の「馬酔木」の創刊に際しては発起人として名を連ねたが、次第に作歌から遠ざかった。歌集に『天之真榊』（学芸書院　昭10）がある。歌は材を神代に取った荘重な古調のものが多い。子規は秀真の影響で造型芸術に興味をもつようになり、彼の持参した粘土で自分の像を作り、秀真宅へ届けて石膏像にしてもらったことがある。

▼ふして見し人已にあらずをとしの庭ながらなる秋海棠（しうかいだう）の花
―「アララギ」明37・11―

河東碧梧桐（かわひがし　へきごとう）

〔概括〕　虚子と並ぶ子規門の俳句の高弟。病あつい晩年の子規の病床に虚子や歌の方の左千夫らと輪番に侍した。潔癖な性格であっただけに左千夫ら根岸派歌人の言動を率直に批判することも多かった。

〔人物〕　俳人。明治六（一八七三）二・二六～昭和十二（一九三七）・二・一。松山市生まれ。本名、秉五郎。父は松山藩に仕えた儒者で、家塾では正岡子規も教えを受けた。同じく松山出身の高浜虚子とともに仙台の二高中退後、正岡子規の門に入り、日本派の双璧と称された。「ホトトギス」「層雲」「海紅」などに関係、個人誌「碧」を刊行し、子規の没後は新聞「日本」の俳句欄の選を継承した。はじめは定型・有季を守っていたが、やがて伝統的な季題を無視し、定型を破壊して、あくまで個人の感覚、官能を通して自然を表わそうとする『新傾向俳句』を唱え、普及につとめた。句集『碧梧桐句集』、句文集『三千里』『続三千里』、俳論集『新傾向句の研究』『子規言行録』等がある。俳句の方の碧梧桐と高浜虚子は郷里が子規と同じ四国の松山で、

入門するのも早く子規の文字どおりの愛弟子であった。その点で短歌の方には二人のような弟子はおらず、左千夫は子規の晩年に入門し、子規より年長であった。しかし、左千夫は子規敬慕の情があつく、病床の子規のことを親身になって心配したので、明治三十五年二月、子規の病状が悪化したときには、碧梧桐・虚子・左千夫らが輪番で病床に侍した。子規がなくなってのち、四十四年に子規庵保存が問題になり、発起人会が作られたときには、碧梧桐・鼠骨・左千夫が幹事に選ばれている。歌人と俳人という違いはあるが、碧梧桐と左千夫とは、子規門の代表的な弟子として、個人的交流はなかなか密なものがあった。左千夫が四十一年一月、「馬酔木」を四巻三号をもって終刊するに際して、「『馬酔木』終刊の消息」を書いて、子規の短歌は自然に親しみ人生を傍観する趣があったが、自分が「馬酔木」を主宰してからは、人生を中心に置いて自然は従とした と述べた。これを読んだ碧梧桐は、「日本及日本人」（明41・9・15）に「その折り〳〵」と題して、左千夫の文章は師の子規をないがしろにするもので、態度が傲慢であると非難した。左千夫はこれに対して「碧梧桐氏に答へる」（「アララギ」明42・1）を書いて反論した。碧梧桐は潔癖で一途な性格だったので、左千夫ら根岸派歌人の言動を率直に批判することもしばしばであった。

木村芳雨（きむら　ほうう）

〔概括〕　第一回の子規庵歌会から出席し、「馬酔木」に歌を寄せた。家が近所のため左千夫と個人的な往来も密であった。

〔人物〕　鋳金家。明治一〇（一八七七）～大正六（一九一七）福島県生まれ。本名、三郎。日暮里に住んで鋳金を業としたが、終生作歌に親しんだ。明治三十二年三月四日の歌人たちによる最初の子規庵歌会から出席、「アララギ」一〇の二（大6・3）まで出詠している。作風は晩年に至ってもそれほど発展を示さなかった。芳雨日記によると左千夫はたびたび彼の家を訪れ夜遅くまで歌を論じたらしい。

▼葉桜のうつりてゆるゝ日南の庭に干したり鋳砂青砂

―「馬酔木」明39・7―

木村秀枝（きむら　ほつえ）

〔概括〕　根岸派の有力地方歌会「沼津短歌会」の創設者で「馬酔木」に歌や写真を寄せた。

〔人物〕　沼津の人。明治三十六年に槇不言舎と沼津短歌会を起こし「根岸短歌会」に属した。秀枝は歌を作るほか、当時珍しかった写真機を購入し、写真を「馬酔木」「アララギ」に費用を負担して載せた。歌を寄せたのは「アララギ」三の六（明43・8）まで。

▼くりや辺の簀棚の下をゆく水の清き流に山葵（わさび）植ゑたり

―「馬酔木」明39・3―

胡桃沢勘内（くるみざわ　かんない）

〔概括〕　根岸派の地方歌会のうちで最も盛んだった信州「比牟呂」の同人の中で特に左千夫に私淑した歌人。「ア

ララギ」の選歌を担当した。

〔人物〕　歌人。銀行員。明治一八（一八八五）・三・六～昭和一五（一九四〇）・一二・二八。長野県筑摩郡島内村（現・松本市）平瀬生まれ。勘内は本名で、平瀬泣崖、無花果、四沢などと号した。松本銀行勤務。十八歳のとき俳句を上原三川に学び、歌も作った勘内は二十歳のとき三川のすすめで伊藤左千夫に師事した。「馬酔木」には二巻三号（明38・5）から歌を寄せ、「アララギ」では選者をつとめた。左千夫が勘内と初めて会うのは三十九年八月の第二回の信州入りのときで、以後、信州をたびたび訪れる左千夫を「比牟呂」同人たちと暖かく迎えた。その同人たちの中でも特に左千夫に私淑した勘内のところには左千夫の書簡が百四十五通あり、これは今日見られる左千夫書簡のうち蕨真宛、長塚節宛についで三番目の数である。左千夫短歌の中の傑作とされる連作「二月二十八日九十九里浜に遊びて」七首は四十二年二月下旬、松本から上京した勘内を伴って九十九里浜に遊んだ折の作。質実な性格の勘内の歌には平明な写生の作が多いが、のちにはやや細みが加わった。歌集に『胡桃沢勘内集』（昭23・11　胡桃沢勘内集刊行会）がある。

▼豆の葉をそよろとかへす秋風に目をさまし鳴くこほろぎのこゑ　―「アララギ」明44・9―

蕨真（けつ　しん）

〔概括〕　左千夫の故郷、千葉県山武郡在住の歌人。左千夫と同じ年に子規に入門。左千夫の主宰する「馬酔木」「アララギ」を財政面から支えた。左千夫宅の茶室唯真閣は蕨真の寄贈したもの。

〔人物〕　歌人。林業家。明治九（一八七六）・八・〇～大正一一（一九二二）・一〇・一四。千葉県山武郡睦岡村埴谷生まれ。本名、蕨真一郎（わらびしんいちろう）。別号、礎山、杉霊（すぎたま）、農林山人など。蕨橿堂（わらびきようどう）（直治郎）は弟、蕨桐軒（一郎）は従弟にあたる。千葉県山武郡に広大な山林を持つ資産家で、明治四十四年に独力で郷里に埴岡農林学校を創設、大正元年十一月には「南総新報」を創刊した。明治三十三年四月、新聞「日本」の子規選の募集短歌に入選したのを機に子規に入門、同年九月、左千夫を本所茅場町に訪ね、同郷ということで親しくなった。子規の没後の三十六年に根岸派の機関誌として「馬酔木」を創刊する際には、左千夫・麓と共にその中心となり財政的にも経費の多くを負担し、同誌の選歌欄も担当した。四十一年創刊の後継誌「アカネ」において左千夫と三井甲之との間に不和が生じ、左千夫や茂吉らが同誌を脱退すると、蕨真は同年十月に自宅から「阿羅々木」を創刊、資金は独力で負担した。しかし、一年後に同誌の発行所が東京の左千夫宅に移り、新人の進出を見るようになってから次第に「アララギ」から遠ざかった。歌集に『林澗集』（大13・11　政教社）があり、巻頭に左千夫が「アララギ」明治四十五年五月号に発表した「礎山先生論」を収めている。蕨真はこのように「馬酔木」や「アララギ」の

刊行を財政面から支えただけでなく、個人的にも左千夫と往来し、左千夫に茶室を建てるため木材を贈るなどした。茶室の「唯真閣」の「真」は蕨真の名を取ったもの。左千夫の蕨真宛書簡は『全集』に二百五十一通あって、左千夫の手紙の中で蕨真に宛てたものが一番多い。蕨真の歌は根岸派の中で最も万葉集の影響が強く、擬古的な表現が目立つ。『林澗集』には長歌が多い。

▼吾病日々に癒えつつさち草の咲けらく今日にあへるうれしも　―「馬酔木」明40・5―

古泉千樫（こいずみ　ちかし）

〔概括〕　左千夫に私淑して千葉県から上京、近くに住んで歌を学び、「アララギ」の草創期を助けた。

〔人物〕　歌人。帝国水難救済会勤務。明治一九（一八八六）・九・二六　昭和二（一九二七）・八・一一。千葉県安房郡吉尾村細野（現、鴨川市）生まれ。本名、幾太郎。別号、沽哉（こさい）、椎南荘主人など。生家は中程度の自作農であった。小学校を卒業後、代用教員をしていたが、その後、県の教育講習所を出て小学校教員となった。早くから「万朝報」「心の花」などに歌を投じていたが、三十七年十九歳のとき雑誌「馬酔木」に「耕余漫吟」と題して「梅雨晴の若葉の森の片明り月の上りを啼く郭公」ほか二十首を投じ、十二首が選ばれ、「一見平淡少しも巧を求めずして精神新し」と激賞されたのを機に左千夫に師事した。明治四十年五月十二日上京して左千夫を訪ね四泊、長塚節・斎藤茂吉らと初めて会った。四十一年、小学校を退職し上京、左千夫の世話で本所区緑町の滝沢宅に下宿し、「心の花」の石槫千亦の世話で帝国水難救済会に職を得た。四十二年「アララギ」が左千夫の手により東京から発刊になると斎藤茂吉とともに左千夫を助けて編集にたずさわり、「アララギ」の草創興隆期における主要同人の一人であった。大正二年七月刊行の六巻六号から大正三年四月の七巻四号まで「アララギ」は彼の家から刊行されている。左千夫につれられて森鷗外の催した観潮楼歌会にしばしば出席し、鷗外、信綱、白秋、啄木らを知った。左千夫の死後、編集事務をめぐって、また文学上の見解で赤彦と感情的な対立を生じ、大正十三年に「日光」が創刊されるとその同人として参加、「アララギ」を離れた。この年八月、喀血して静養。十四年、自選歌集『川のほとり』を改造社より出版。十五年一月、帝国水難会を退職。五月には門下と「青垣会」を結成したが、二年一月以後は全く病床に就き、八月に四十一歳で世を去った。十一月に「青垣」が「古泉千樫記念号」として橋本徳寿ら門人たちにより創刊された。没後、歌集『屋上の土』（昭3・5　改造社）・『青牛集』（昭8・2）、歌論集『随縁鈔』（昭5・3　改造社）が刊行された。千樫の歌は写生を基調にした平淡な抒情的作風を特徴とする。左千夫入門のころについて茂吉と比べると、振幅に欠けるうらみはあるが、早くから「万朝報」や「心の花」等に投稿していただけにずっと安定した詠みぶりで

ある。

▼街の上にうすきほこりのにほひ立ちて明けはなれゆく今日のかなしさ　—「アララギ」大元・10—

小出粲（こいで　つばら）

〔概括〕　御歌所派歌人の中では異色の軽快な歌を詠んだが、左千夫は明治三十一年の「日本」紙上に「非新自讃歌論」を発表して粲の歌を激しく攻撃し、しばらく「日本」紙上をにぎわわせた。

〔人物〕　歌人。天保四（一八三三）・八・二八～明治四一（一九〇八）・四・一五。幼名、新四郎。号は梔園（しえん）。浜田藩士松田三郎兵衛の四男で、江戸生まれ。小出修吉の養子となった。江戸派の歌人、瀬戸久敬に歌を学び、藩主の近習、家令を勤めた。高崎正風の知遇を得てその推挙で明治十年に御歌所に入り、文学御用掛を拝命、二十五年には御歌所寄人となった。歌集に『くちなしの花』雪・月・花三巻（梔園社　明27・3）がある。晩年の作は新派和歌の表現を採り入れて軽快で、御歌所派歌人の中では異色であった。明治三十一年二月七日に粲の歌が「新自讃歌」と題して新聞「日本」に載ると、左千夫は十日の同紙に「非新自讃歌論」を書いて、このような作は歌とは言えぬと口を極めて非難したので、駿台小隠、正岡子規なども口を出し、「日本」の紙面をにぎわわせた。

▼しづの男が牛ひきかへるうしろかげ見る見る消えて野は暮れにけり　—「日本」明31・2・7—

斎藤茂吉（さいとう　もきち）

〔概括〕　左千夫門の高弟。左千夫は茂吉の歌を初めて見た時、天賦の才を見抜いて、以後熱心に指導した。茂吉も師の没後、評伝『伊藤左千夫』などを著わし、「先師」と呼んで顕彰、左千夫の一般からの評価を高めた。

〔人物〕　歌人。精神科医。明治一五（一八八二）・五・一四～昭和二八（一九五三）・二・二五。山形県南村山郡金瓶（かながめ）村（現、上山市（かみのやま））金瓶）生まれ。旧姓、守谷。別号、水上守暁（みなかみしゅぎょう）、童馬山房主人。医師斎藤紀一の養子となる。東大医科卒。茂吉は明治三十九年に伊藤左千夫の門に入った。歌について質問の手紙を送って、左千夫から懇切な返信を受け取り感激した茂吉は自作の短歌十首を添えて礼状を出す。すると三月二日付で左千夫からはがきがくる。それは「貴君の作歌の傾向は甚だ面白く候。貴君は一種の天才なる事を自覚し、今の儘にて真直に脇目をふらずにやつて貰ひたく候。決して真似などせぬ様に願ひたい。」云々というもので、三月十八日、茂吉は思い立って東京本所茅場町三丁目の無一塵庵にはじめて左千夫をたずね入門を果たすのである。右の左千夫の書簡は伯楽が名馬を見抜いたというべきか、茂吉の将来を予見している。茂吉は左千夫の指導のもとに「馬酔木」を経て「アララギ」の創刊に参加、古泉千樫、中村憲吉、土屋文明らとともに、門下の新鋭作家となってゆく。左千夫に連れられて森鷗外の催した観潮楼歌会に出席したのを機縁に北原白秋、木下杢太郎、阿部次郎らを知

り時代の新しい潮流を体得する。処女歌集『赤光』は写実に基礎をおきながら強烈な官能が盛られており、近代人の悲哀を抒情した歌集で広く文壇の注目を集めた。以後、正岡子規の写生論を深化させた「実相に観入して自然、自己一元の生を写す」という立場を作歌に実践して『あらたま』（大10）、『暁紅』（昭17）、『白桃』（昭17）、『白き山』（昭24）などの多くの歌集を生んだ。ほかに『童馬漫語』『短歌写生の説』などの歌論集、『柿本人麿』（全五巻）『正岡子規』『伊藤左千夫』などの研究書、『念珠集』などの随筆があり、『斎藤茂吉全集』全三十六巻（岩波書店）に収められている。茂吉の写生論が子規の写生を基礎にしていることはいうまでもないが、自己の内面を重視する点において、「叫びの説」を説いて内から衝迫する感情の揺らぎがさながら声調のひびきとなって現れる歌をよしとした左千夫の短歌観ときわめて近いものがある。晩年の左千夫のもとに、学生であった茂吉は絶えず通い、雑誌の編集を手伝うかたわら歌の添削指導を受けていた。歌人としての出発の時期に左千夫から直接手を取って教えられた影響は大きかった。体質的にも、主情的な点において二人は共通しているといえる。明治の末年、文壇は自然主義から耽美主義、理想主義へとめまぐるしく動揺する。その影響の圏外にいられなかった茂吉を始めとする「アララギ」の若い世代の歌人はそれに反対する左千夫と激しく対立、論争を起こしたが、それは一時期のことで、茂吉はのちに自身を師運に恵まれた者とし、『伊藤左千夫』（中央公論社昭17・8）などによって左千夫の顕彰を怠らなかった。

▼うつせみのいのちを愛(を)しみ世に生くと狂人(きやうじんも)守りとなりて
ゆくかも　―「アララギ」明44・1―

阪井久良伎（岐）（さかい　くらき）

〔概括〕　新聞「日本」の記者で洒脱な評論を書いた。左千夫と個人的に親しく、左千夫が歌壇でおこした「非新自讃歌論」や「鉄幹子規不可併称論」の論争には久良伎が一枚かんでいた。

〔人物〕　歌人。川柳宗匠。新聞記者。明治二（一八六九）・一・二四～昭和二〇（一九四五）・四・三。横浜生まれ。本名、辨(わかち)。別号、徒然坊・くちあみ・端霊(みずたま)。東京高等師範学校を卒業、新聞「日本」、「報知新聞」の記者となる。「心の花」「大帝国」等に歌論を載せ、明治三十一年には正岡子規の「百中十首」の選を行なった。同年二月七日、久良伎が徒然坊の名で新聞「日本」に明治の歌壇を後世に伝えるためと前書きして「新自讃歌」欄を設け、その第一回として小出粲の歌を掲載すると左千夫はこれを非難した「非新自讃歌論」を十日の同紙に発表。さらに駿台小隠の反論に応えて二十三、四の両日「小隠子にこたふ」を寄せた。これには子規も言及するなど久良伎の担当した「日本」紙上の「新自讃歌」は左千夫の投書がきっかけで大いに問題となった。さらに三十三年八月、子規が与謝野鉄幹に「新派同士の喧嘩こそ必要と存じ候」と当時全盛の新詩社に挑戦す

る姿勢を示したとき、左千夫は「心の花」で鉄幹が子規の後輩であるかのように言い久良伎も「大帝国」で興味本位に伝えた。怒った鉄幹は「明星」誌上で応酬、左千夫・久良伎の言は子規の使嗾によるものであろうと言うと、各雑誌に投書が殺到し、「鉄幹子規不可併称」の論議は歌壇をにぎわした。この事件は両人の、新詩社よりも根岸派をよしとする発言がもととなって起こったのであるが、左千夫は子規を至上とする門弟、久良伎は子規と同じ「日本」の記者であった。左千夫は久良伎の主宰する歌会「七日会」にも出席しており、個人的な往来もあった。左千夫には久良伎に贈った「藤原久良岐ぬしへ」等の文や歌がある。久良伎は後に川柳新派へなづち派の宗匠として知られるに至った。

▼ニイチェ何トルストイ何我にありて甚太が味噌の香をきくがごとし　―『珍派詩文へなづち集』明34・12―

坂本四方太（さかもと　しほうだ）

〔概括〕　左千夫も参加した写生文研究会「山会」の熱心な会員。だが左千夫は四方太や虚子の俳句趣味、非人情の写生文には強く反発した。

〔人物〕　俳人。明治六（一八七三）・二・四～大正六（一九一七）・五・一五。鳥取県生まれ。本名、四方太（よもた）。別号、文泉子など。二高在学中に高浜虚子、河東碧梧桐を知って句作に入り日本派の作風を学び、東大入学後は正岡子規の指導を受けた。明治四十一年東大助教授兼付属図書館司書となる。俳句では三十一年から「ホトトギス」の選者をつとめた。一方、子規庵の写生文研究会「山会」にも明治三十二年十一月の第一回から出席し多くの作品を「ホトトギス」に発表するとともに同誌で募集写生文の選にあたるなど写生文に熱意を示した。左千夫は三十四年から「山会」に出席、研鑽を積み、「午前二時」「千本松原」等を「ホトトギス」に発表、さらには「野菊の墓」などの小説を書くに至る。その意味で左千夫が「山会」に負うものは大きいのであるが、子規没後の「山会」で指導的地位にあった四方太や虚子が写生文は俳句趣味の「非人情」の立場に立ち、人間の喜怒哀楽も自然に対するように傍観の姿勢で描写するように主張したのに左千夫は終始強く反発した。

佐佐木信綱（ささき　のぶつな）

〔概括〕　根岸派の機関誌として「馬酔木」が創刊されるまで信綱の主宰する「心の花」は、左千夫ら根岸派歌人たちの作品発表の場であった。後年、観潮楼歌会でも左千夫と信綱はよく顔を合わせた。

〔人物〕　歌人。国文学者。明治五（一八七二）・六・三～昭和三八（一九六三）・一二・二。三重県鈴鹿市石薬師町に国文学者歌人弘綱の長男として生まれる。号、竹柏園。姓は元来佐々木であるが明治三十六年に中国南部を旅し、その折の名刺に「佐佐木」と書いてよりこれを用いる。明治十五年に父とともに上京、東京帝大古典科卒。三十一年、「心の華」（のち「心の花」）を機関誌として結社竹柏園を結

成、いわゆる和歌革新運動の一翼をにない、「広く、深く、おのがじしに」を信条として多くの門人を育成した。歌集に『思草』（明35・10）・『新月』（大元・12）など多数があるほか、『日本歌学史』『校本万葉集』など国文学の方面の業績も大きい。初期の「心の花」は結社竹柏園の機関誌というよりも短歌の総合誌の性格を持ち、誌面を広く提供したので機関誌を持っていなかった根岸派歌人たちも多く出詠した。左千夫もたびたび同誌に投書、彼の文章がもとで三十三年には同誌を中心にいわゆる「鉄幹子規不可併称論争」が起こった。また明治四十年三月から四十三年四月まで二十数回にわたって開かれた森鷗外主催の観潮楼歌会には左千夫、与謝野鉄幹とともに最初から出席しており、左千夫は鷗外、信綱、鉄幹などを前に盛んに自説を主張したらしい。そのころのことを信綱は、左千夫が世を去った大正二年の十一月発行の「アララギ　伊藤左千夫追悼号」で、「名古屋の一夜」と題として「日露の戦役から帰られた鷗外博士は、毎月短歌会を催された。いつも夜が更けて人通りの少ない千駄木から本郷の通を、伊藤君や与謝野君と並んで話しつつ帰つて来た。伊藤君のあのがつしりした体格、重みのある中に、愛敬のあつた声音」と追懐している。

▼我が行くは憶良の家にあらじかとふと思ひけり春日（かすが）の月夜

―「心の花」明42・7―

佐瀬春圃（させ　しゅんぽ）

〔概括〕　小学校の恩師。卒業後はその塾にも通った。左千夫の初めの号である春園（はるその）は春圃にちなむもの。

〔人物〕　教員。文政元年（一八一八）・一・一〇～明治三八（一九〇五）・四・三〇。上総国山辺郡東中村（現、千葉県東金市東中）に土屋三右衛門の次男として生まれた。本名、亀雄。その後同村の佐瀬安左衛門の養子となる。明治三年から早船村（現、山武郡松尾町）の月蔵寺で子供に教えていたが、明治五年八月義務教育制度が施行され翌六年、学制による嶋小学校の開設とともに教員となり十二年に退職した。左千夫はこの嶋小学校に明治六年に入学、九年に卒業した。同小学校には校長の向後治左衛門のほか大関剣峰・山陽琴美、それに父の伊藤良作らが教員としていたが左千夫は殊に春圃から影響を受け、明治十年には春圃の塾に入り漢籍を学んでいる。春圃はこの頃小学校で教鞭を執るとともに家でも私塾を開いていたらしい。左千夫ははじめ春園と号したが、この号は師の佐瀬春圃にちなむもので、私淑していたことをうかがわせる。春圃の在世中の明治二十六年十二月二十四日、門人たちの手で塾近くの松林に彼を顕彰する「佐瀬春圃之碑」が建立された。

佐藤紅東（さとう　こうとう）

〔概括〕　左千夫に歌の指導を受けた盛岡の歌人。

〔人物〕　明治一八（一八八五）・一・二一～明治四四（一九一一）・九・五。盛岡生まれ。本名、庄太郎。別号、春又春（しゅんゆうしゅん）、多々良山人など。盛岡市希町に住んだ。盛岡で杜陵短歌会

を起こし、「馬酔木」に歌を投じて左千夫の指導を受けたが、胸を病み二十六歳で没した。

▼男の子らが五たり六人肩ぬぎて畳さし居り春の花咲く

—「馬酔木」37・5—

寒川鼠骨（さむかわ　そこつ）

〔概括〕　左千夫も参加した写生文研究会「山会」の有力メンバー。

〔人物〕　俳人。新聞記者。明治八（一八七五）・一一・三〜昭和二九（一九五四）・八・三。愛媛県松山市生まれ。本名、陽光。第三高等学校中退。三高時代に河東碧梧桐と同宿し句作を始め、高浜虚子と三人で競作。明治三十年、大阪朝日新聞記者となり、翌年上京、新聞「日本」の記者となり、正岡子規のそばにあって俳句や写生文を彼に学んだ。明治三十年に新聞「日本」が時の総理山県有朋を攻撃した際、鼠骨が新聞署名人だったため官吏侮辱の罪で十五日間入獄した。その体験記を写生文として「ホトトギス」に発表、のち『新囚人』と題する単行本としても刊行され注目された。写生文に関する著作に『写生文　作法及其文例』（明36）がある。左千夫は「馬酔木」二号（明36・7）でその紹介を行なっている。同号にはまた鼠骨の写生文「大売出し」を掲載。大正十三年春から香取秀真、蕨真らと毎月十九日の子規の忌日に子規生前の歌会を髣髴させる子規庵歌会を開き子規の遺風を守った。晩年は子規庵に住み、戦災後はその復興に努めた。

篠原志都児（しのはら　しずこ）

〔概括〕　左千夫門下のうちで最も師に私淑した歌人。左千夫は志都児の住む蓼科で晩年を送りたいと考えた。

〔人物〕　歌人。明治一四（一八八一）・四・一三〜大正七（一九一八）・七・一九。長野県諏訪郡北山村生まれ。本名、円太。号を初め千洲、のち志都児と称した。志都児について、明治書院の『現代日本文学大事典』ではシズジと読みを示すが、斎藤茂吉の『明治大正短歌史』・『続明治大正短歌史』ともに「しずこ」とふりがなをふっている。「志都児」という号はある女性にちなんだものといい、同門の茂吉のふったシズコの読みが正しい。志都児は島木赤彦の結成した諏訪短歌会に加わり「比牟呂」に歌を載せたが、「馬酔木」には明治三十六年十一月の六号から作品を寄せ、「アララギ」に及んでいる。作品を寄せるに熱心なこと信州同人の中でも一、二で「馬酔木」全体を通じていうと長歌二首、短歌二百三十四首、写生文八編を数え、「アララギ」にも創刊号から十一巻八号（大7・8）までに二百二十七首を発表している。志都児は大正七年七月に腸結核のため世を去ったが死の直前まで作歌をつづけ、「アララギ」に歌を寄せた。志都児（千洲）が明治三十七年に日露戦争のため出征した時、左千夫は「信濃の歌人篠原千洲征露皇軍に従ひ将に満州に航せむとす今や千洲広陽にありて大命を待つ予即遥に歌を寄せて其行を送る時に甲辰三月二日」の題詞で八首の短歌を志都児に送り、それを「馬酔木」十

号（明37・9）に載せた。志都児は一旦戦地に渡ったが、病気のため送還され、八月十二日に麹町陸軍予備病院で召集解除になった。退院すると志都児はその足で左千夫宅を訪問、三泊してゆく。この時、左千夫は志都児から蓼科山の話を聞いて信州行きを決心したようで、十一月二十三日に出発、甲府に寄ったあと二十五日に諏訪に到着、布半旅館で島木赤彦・志都児・森山汀川らに迎えられた。この折は蓼科山麓の北山村新湯（巌の湯）に泊まったあと二十九日から志都児宅に三泊した。左千夫はこの時を初めとして生涯に十回信州入りをしているが、その中の五回、蓼科北山を訪れ、新湯（巌の湯）温泉に浴し志都児宅で世話になっている。第六回の四十一年十月の折には胡桃沢勘内宛の葉書で「蓼科に埋骨の地を得たしの念頻に起る十坪の地と方丈の仮庵を結び吾が余生をここに籠りたい」と言い、翌年八月の七回目の信州入りの際も、蓼科の新湯や志都児宅に数日滞在、「アララギ」二の二（明42・10）に発表の歌「信州数日」で「二十五日、蓼科に入りて巌温泉に浴す。志都児又従ふ。滞在数日、予は蓼科山に老を籠らむと思ふ心いよいよこひまさりぬ。」と述べている。このように左千夫が信州の蓼科を好むようになった理由としては、彼が千葉県の九十九里浜に近い平坦な土地に育ったため八ケ岳を遠くに眺める起伏に富んだ風景が珍しく、温泉が気に入ったという風土の問題があろう。しかし、それとともに、もう一つ、当時信州には「比牟呂」に依っていた島木赤彦を中心とする人々がいて、これらの人々が暖かく迎えてくれた、その人間関係が左千夫を信州へ引き付けたとも言えよう。そうした信州歌人の中でも、志都児は特に左千夫を慕った人物であった。十回の左千夫の信州入りを十回とも迎えもてなしたのは志都児のみである。

▼蓼科の草深みちのつゆに濡れ分けゆくあけやとりのさへづり　―「アララギ」明44・11―

島木赤彦（しまき　あかひこ）

〔概括〕　根岸系の地方歌会のうちで最も活発だった信州の「比牟呂」の主宰者。赤彦ら信州の歌人たちに迎えられて左千夫は前後十回も長野県に遊んだ。

〔人物〕　歌人。教員。明治九（一八七六）・一二・一七～大正一五（一九二六）・三・二七。長野県上諏訪町（現、諏訪市）生まれ。本名、久保田俊彦。旧姓、塚原。下諏訪町の久保田家の養子となる。別号、山百合（やまゆり）、柿乃村人、柿人など。長野師範学校卒業。小学校教員をしながら作歌、明治三十六年、「氷むろ」（のち「比牟呂」）を創刊、信州の歌人を率いて作家活動を展開するが、同年に創刊された東京の伊藤左千夫が主宰する「馬酔木」にもその五号（明36・10）から同人が揃って歌を寄せた。「馬酔木」は当時同人が少なく、特に地方で活発な活動を見せた者はきわめて僅かであったので主宰する左千夫は赤彦をはじめとする「比牟呂」同人たちに深い信頼を示した。「馬酔木」の後継誌「アララギ」が明治四十二年に発行所を最初の千葉県

山武郡の蕨真のもとから東京の左千夫宅に移したとき、赤彦は「比牟呂」同人を率いて「アララギ」に合併、左千夫門下の新鋭歌人、斎藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉、土屋文明などと並んで活発な作歌活動をつづけてゆく。左千夫の没後の大正三年、教育界から退き、上京して「アララギ」の編集責任者となる。このころから「アララギ」派は飛躍的な発展を示しその着実な写生歌風は広く歌壇に影響を及ぼした。彼は大正十二年、『歌道小見』を著わして全心を集中し単純化することによって歌の究極所である「人生の寂寥所」に到達するという東洋的、諦念的な「鍛錬道」を説いた。歌集に中村憲吉との共著『馬鈴薯の花』（大2）をはじめとして『切火』（大4）『柿蔭集』（大15）などがあり、評論に『万葉集の鑑賞及び其批評』（大14）等がある。岩波書店から『赤彦全集』全八巻が刊行されている。篠原志都児の項で触れたように左千夫は生涯に十回信州を訪れ、滞在の日数は通算すると八十日に達する。そして晩年を蓼科の山に籠って過ごしたいという希望を漏らしている。その理由の一つには、信州には赤彦を中心とする「比牟呂」の歌人たちがよくまとまって着実な動きを示しており、彼らが左千夫を暖かく迎えてくれたということがあった。左千夫は、地方の歌人の中でこの赤彦を節とともに高く評価、深く信頼していた。

▼この朝の汽車はすぎけれ家並の日あたりおそく静かなるかも

—「アララギ」明45・1—

釈迢空（しゃく　ちょうくう）

〔概括〕　「左千夫の小説」という文章を書き、「野菊の墓」を好意的に紹介した「アララギ」歌人。

〔人物〕　歌人。国文学者。民俗学者。明治二〇（一八八七）・二・一一～昭和二八（一九五三）・九・三。大阪生まれ。本名、折口信夫（しのぶ）。歌人としては釈迢空の号を、学者としては折口信夫の本名を用いた。国学院大学卒業。はじめ服部躬治（もとはる）に入門したが学生時代の明治四十二年、東京根岸短歌会に出席、「アララギ」に加わった。大正六年、同人となり、選歌を担当したが、十年には選者を辞し、十三年には北原白秋を中心とする「日光」に参加した。歌集に『海やまのあひだ』（大14・5）、『春のことぶれ』（昭5・1）などがあり、『折口信夫全集』三十一巻（中央公論社）が刊行されている。左千夫とは歌会で二度ほど会っただけでそれほどのつながりは見られない。しかし、迢空が大正八年七月の「アララギ」十二巻七号「伊藤左千夫号」に発表した「左千夫の小説」と題する文章は左千夫の写生文および小説について述べたもので、左千夫の小説の特色をよくとらえており、「野菊の墓」に高い評価を与えている。

▼七銭が花をもとめて帰るなり年の夜、霜の降（お）りのさかりに

—「アララギ」大7・3—

杉村楚人冠（すぎむら　そじんかん）

〔概括〕　信仰の篤かった左千夫が参加した「新仏教同志会」のリーダー。

〔人物〕　新聞記者。評論家。明治五（一八七二）・八・二八～昭和二〇（一九四五）・一〇・三。和歌山市生まれ。本名、広太郎。別号、縦横。英吉利法律学校（現、中央大学）、国民英学会、ユリテリアン自由神学校に学んだ。国民新聞翻訳係、英文「反省雑誌」編集をしたのち、明治三十二年、アメリカ公使館の通訳となる。そこではシルクハットの帽子掛を米人と差別していたことから史記の「楚人は沐猴にして冠するのみ」にちなんで楚人冠と称した。三十六年朝日新聞社に外電係として入社、四十年にはロンドン特派員となった。その後、調査部、記事審査部を創設、縮刷版や日刊「アサヒグラフ」を創刊、「アサヒグラフ」に「湖畔吟」を、「週刊朝日」に「山中説法」を連載し、皮肉とユーモアに富む随筆は好評を博した。楚人冠はアメリカ公使館に勤務した明治三十二年、高島米峰とともに仏教清徒同志会を結成した。左千夫は三十三年八月からこの会の機関誌「新仏教」に投稿を始めたが、三十六年四月には同誌編集員となっている。月々の例会に出席したほか三十六年二月十四日には「予が宗教観」と題して講演した。この会とのかかわりの深かった左千夫は会の中心的な人物の楚人冠と交わりを深めたが、四十四年の七月十八日にはこの二人に高島米峰を加えた三人が千葉県の稲毛の海に行き大いに語り合っている。

鈴木葯房（すずき　やくぼう）

〔概括〕　子規の信頼が厚いとはいえなかった左千夫とは対照的に子規の信頼のあつかった歌人。

〔人物〕　中国文学者。漢詩人。歌人。明治一一（一八七八）・一・一八～昭和三八（一九六三）・一・二〇。新潟県生まれ。本名、虎雄。漢詩人としての号は豹軒（ひょうけん）。明治三十五年東京帝大漢文科卒。東大講師、東京高師教授、京大教授を歴任。文学博士。学士院会員。明治三十三年から子規に師事して根岸短歌会に加わり、子規の病が篤くなってからは彼に代わって新聞「日本」の募集歌の選にあたり、子規没後も「日本」に拠り左千夫とは別の道を歩んで「馬酔木」に対しては時に歌を寄せるにとどまった。明治三十一年から昭和二十九年までの長歌・短歌・旋頭歌・今様を収めた『葯房主人詠草』（昭31　あけび社）がある。子規は葯房の歌を「漢詩の想を以て和歌の調を為す」と評したが、形式、律調を重んずる傾向が強い。

▼大刀根の川こぎくだる大船の帆柱たかくほたるとぶみゆ
—「日本」明35・6・28—

関澄桂子（せきずみ　けいこ）

〔概括〕　明治三十年ごろに左千夫が出席していた月並歌会の宗匠。土屋文明は、左千夫の代表作「牛飼が歌詠む時に……」の歌は彼が桂子の歌会の席で詠んだものではないかと推測している。

〔人物〕　旧派和歌の女流の宗匠。桐の舎と称し、和歌のほか習字なども教えた。桂子という名は旧派らしくカツラコと読んだとも考えられ、そのようにルビのある書物も見

られるが、桂子の師匠の橘東世子（とせこ）の編になる『明治歌集』の第三～六編には関澄けい子とあるので、しばらくこれに従う。初め千住で教えていたが、のち日本橋檜物町に移った。千住時代の桂子のもとへ森鷗外の妹の喜美子が通った（小金井喜美子「千住の家」「スバル」明41・1）。日本橋では左千夫が歌会に出るようになる前にすでに岡麓、香取秀真、桃沢茂春が出ていた（岡麓「初めて逢つた時」「アララギ」大8・7）。この三人は子規の根岸庵で再び左千夫と逢う。鷗外が「アララギ」大正二年十一月号「伊藤左千夫追悼号」のために筆を執った「伊藤左千夫年譜稿」に「桂子は橘東世子の門人にして疲癃（せむし）の病あり。左千夫の魁偉を以てして対坐談論す。頗る奇観なりき。岡麓その席に列してこれを見、後話柄となしたりき。」とある。桂子の師の東世子は江戸時代の国学者、橘守部の子の冬照（病没）の妻で、子の道守と椎本吟社を興し、歌を教えて月並歌会を開いていた。佐々木弘綱の竹柏会、中島歌子の萩の舎などにつぐ歌塾で、東世子およびその没後は道守が『明治歌集』を第一編（明9）から第九編（明32）まで刊行している。左千夫らは、その東世子の弟子筋の桂子の歌会に出ていた。文明は、桂子が明治三十年七月二十一日付のはがきで「先会の御歌牛飼天に致し候もの二三人有之、併し惣天は私と相成候。」とあるのに着目して、ここにいう「牛飼」の歌が、例の「牛飼が歌詠む時に……」の歌あるいはその原型ではないか。今まで桂子が左千夫の歌に及ぼした影響といったものはほとんど考慮されなかったが、桂子を通じて師の橘東世子、その夫道守の父である守部につながる。その関係で左千夫は万葉集を読むようになり、歌に万葉調が見られるに至ったと推測している。しかし、桂子、東世子、道守の歌というのは

うぐひすのももよろこびのこゑす也皆あら玉の年やほぐらん　桂子

あやにくにうれしきことはうたかたの泡ときえゆく世のならひかな　東世子

せきいるるさとの小川の水車くるるまでとや早苗とるらん　道守

のような歌で、万葉集とはほとんどかかわりのない旧派の俗調である。考えようによっては、このような歌風であったからこそ多くの弟子を持ちえたともいえよう。橘守部の子孫や、その弟子というだけで万葉調の歌を詠むとは簡単にいえないのではないか。桂子のはがきはただ「牛飼」というだけで、歌そのものは不明であるし、その歌会に出ていたはずの岡麓が「この歌は作者が先生（筆者注、正岡子規を指す）にお見せした歌でして、この後自他共に『牛飼左千夫』と呼び馴れたのはこの歌があつたからであります。」（『左千夫歌集合評』昭19・7　三学書房）と言っているので、「牛飼が歌詠む時は……」の歌を左千夫が桂子の歌会で詠んだとは考えにくいように思う。

高島米峰（たかしま　べいほう）

〔概括〕　左千夫が仏教信仰を深める上でかかわりのあった「新仏教同志会」のリーダー。

〔人物〕　宗教家。大学学長。明治八（一八七五）・一・一五～昭和二四（一九四九）・一〇・二五。新潟県中頸城郡吉川村の寺院真照寺に生まれた。幼名を大円、長じて米峰と号した。井上円了の哲学館（東洋大学の前身）を卒業後、「東洋哲学」編集、新聞記者、中学教師、出版社経営などの職業を転々。多くの仏教書、哲学書を出版するうち、明治三十二年、同志の者とともに仏教改革運動を展開、廃娼、禁酒禁煙、貧民救済運動に挺身した。昭和十八年東洋大学学長となる。米峰らが三十二年に結成した仏教清徒同志会はイギリスの清教徒（ピュリタン）の活動にならって仏教を改革し、信仰と生活の清純を保とうとしたことからこの名がつけられた。三十六年三月には「新仏教同志会」と改称した。この会は三十三年七月から機関誌として月刊で「新仏教」を刊行したが左千夫は翌月刊行の第二号から作品を載せるようになり、三十六年二月十四日の第二十一回例会では「予が宗教観」と題して講演、同年四月には雑誌の編集員に加えられた。仏教信仰の篤かった左千夫は終生この会とかかわって、この会のために力を尽くした。「新仏教」の編集の中心となり健筆を振るった米峰とは個人的にも往来し、交わりをつづけた。明治四十年に左千夫は米峰のすすめで「釈尊降誕祭之歌」と題する短歌十二首を作歌、四月発行の「新仏教」八巻四号に発表している。三月十四日付の米峰宛左千夫書簡には「先づ大兄に感謝する。大兄の要求なかりせば、僕は恐らく、此歌を作らなかりしならむと思へばなり。僕常に歌を作り居るも、今回の如く、作り終つて後の、愉快なる精神の波動、長かりしことはあらざりき。」といったことばが見える。左千夫の信仰生活の上で最もかかわりが深かったのが米峰である。米峰は大正二年十一月発行の「アララギ」六巻十号「伊藤左千夫追悼号」に故人の思い出を記している。

▼粟の畑薩摩芋の畑黍の畑ここを吾世と高鳴く雲雀（ひばり）

―「アララギ」明44・9―

高浜虚子（たかはま　きょし）

〔概括〕　子規が信頼した俳句の方の高弟で「ホトトギス」を主宰した。写生文にも熱心で、作品を同誌に掲載したので左千夫は写生文や小説をたびたび「ホトトギス」に発表した。

〔人物〕　俳人。小説家。明治七（一八七四）・二・二二～昭和三四（一九五九）・四・八。松山市生まれ。本名、清。中学時代から河東碧梧桐とともに正岡子規に近づき、特に二高中退後は俳句に力を注いで子規の俳句革新を助けた。明治三十年に柳原極堂が松山で創刊した俳誌「ほとゝぎす」を翌年に虚子が東京に移し、刊行した。この雑誌は今日も続いて刊行されている。明治末年、夏目漱石の活動に刺激を受けて写生文から小説に移り、「俳諧師」「柿二つ」な

どの長編小説を発表、余裕派文学の代表作家となったが、碧梧桐が定型を破壊し季題を無視した新傾向句運動を推し進めようとしたのに対抗して、虚子は大正二年、俳壇に復帰し有季定型の伝統を守る努力をつづけた。昭和二年には花鳥諷詠詩としての俳句を主張している。「ホトトギス」により数多くの俳人を育成した。句集に『自選類題虚子句集』『五百句』、評論に『俳句の五十年』『正岡子規』などがある。左千夫とは子規の門人ということで交際の機会が多かった。左千夫は茅堂の俳号をもち、子規庵句会に出席していたし、子規を中心とする写生文の研究会「山会」にも出て虚子と顔を会わせる機会は多かった。明治三十五年、子規の病気が悪化してからは、虚子、碧梧桐、左千夫が輪番で看病にあたっている。それとともに、虚子が「ホトトギス」を発行していたので、写生文に関心をもち、やがて小説を書くようになった左千夫は、同誌に作品を載せることが多く、幾度も虚子の世話になっている。小説だけに限っても「ホトトギス」に掲載の作品は、「野菊の墓」「隣の嫁」「春の潮」「浜菊」「紅黄録」「告げびと」「胡頽子」「陽炎」「奈々子」「箸」「真面目な妻」「去年」「提灯の絵をかく娘」「合歓木」の十三編にのぼる。夏目漱石は子規なきあとの「山会」で主導的地位にあった虚子の勧めで文章を書くようになる。「吾輩は猫である」は「山会」に出したあと「ホトトギス」に掲載され、好評のため続編を書き継ぎ、これを一つの契機としてついに作家として立つに至った。同様に左千夫や長塚節も「山会」に出席、「ホトトギス」に作品を発表する機会を重ねることで散文執筆の力を磨き、小説家としても認められるようになった。その意味で漱石や左千夫や節が虚子に負うところは大きい。明治三十八年十二月発行の「ホトトギス」九巻三号の「消息」では新年号の予告として「野菊の墓」について「其名の示す如き野趣に饒かなる可憐の小説にして或人がエノックアーデンの面影ありと推称せられる程のものに候。」と述べている。この文章は恐らく虚子自身の筆になるものと考えられるが、「野菊の墓」を「エノックアーデン」にたとえた文中の或人というのも、虚子が「文章入門」（「ホトトギス」大元・11）の中で、三高生のころ虚子は俳句よりむしろ小説に興味をいだき、テニソンの「エノックアーデン」やサッカレーの「虚栄の市」に熱中したことを書いていることから判断すると、虚子自身のことかと推察される。

近角常観（ちかずみ　じょうかん）

〔概括〕　左千夫に親鸞信仰を深めさせた宗教家。

〔人物〕　宗教家。明治三（一八七〇）・四・二四～昭和一六（一九四一）・一二・三。滋賀県の浄土真宗大谷派寺院西源寺に生まれる。東京帝大哲学科卒。明治三十二年、宗教法案が議会に提出されると反対運動の急先鋒となって法案を葬った。その後、東本願寺留学生として欧米の宗教界を視察、帰国後、東京本郷森川町に求道学舎を設け、雑誌「求

道」を発刊して親鸞信仰の宣揚弘道につとめた。左千夫は明治三十七年に入門した三井甲之の勧めで常観の説教を聞き、「求道」を購読、同誌にたびたび短歌その他を寄せて、熱心な親鸞聖人の教えの信者となっていく。三十八年に左千夫は従来の子規忌歌会を改めて、「十九日会」と称して歌と信仰について語る会にするが、その第一回の四月十九日の会には常観も出席している。

柘植潮音（つげ　ちょうおん）

〔概括〕　子規在世中の根岸庵歌会の歌仲間で親しい仲だったが、左千夫が小説「浜菊」で潮音宅を訪れたとき客あしらいが行き届かず不快を感じたことを私小説風に書いたので、潮音は絶交するに至った。

〔人物〕　歌人。明治一〇（一八七七）・七・七・三～昭和一〇（一九三五）・一一・一八。東京生まれ。本名、惟一。別号、竹嶼漁者。父は元美濃大垣藩士で潮音の出生当時は旧藩主戸田氏の家扶（執事）を勤めていた。一高在学中の明治三十年に山田三子、松根東洋城らと一高翠風会を結成、俳句を作った。三十二年七月、子規庵の句会に出席、以後句作に努め、子規によって「明治三十二年の俳句界」（「ホトトギス」昭33・1）で同年中に頭角を現わしたものの筆頭に挙げられている。一方、潮音は三十二年八月から子規庵歌会に出席、先に加わっていた香取秀真、岡麓、三十三年に参加した伊藤左千夫、長塚節らを知る。三十四年に両親とともに岐阜県大垣市に帰ったが、三十六年に根岸短歌会の機関誌として「馬酔木」が刊行されると短歌や詩、「大垣だより」と題する随想などを投稿した。「馬酔木」には、「鵜篝会詠草」として潮音のほか塩谷華園（鵜平）、松原蓼圃、日比帰麓園などの短歌を載せているが、潮音はその中心的存在であった。三十七年八月七日付の節宛書簡で左千夫は「潮音と山百合に逢い度、吾意中の人、君と合せて三人のみ」と漏らしており、左千夫の潮音に対する信頼がわかる。左千夫は四十一年五月、信州、越後鯖石、敦賀、京都、名古屋を経て二十一日に大垣の潮音宅を訪れた。その時の待遇に不満を感じた左千夫はこれを題材にした小説「浜菊」を書いて「ホトトギス」（明41・9）に発表した。東京の歌会の同人であった旧友を久しぶりに訪問して冷遇されたわびしさを場所や名前は変えたものの私小説風に書いてある。これを読んだ潮音は同年十二月八日付の長塚節宛書簡で「小生よりは今後氏に対してそれとなく一切の交通音信を断つべく決心致候」云々と述べており、左千夫との交際は断たれた。

▼伊吹根に朝登らんと麓路の花野を過ぎぬ清き月夜に
—「馬酔木」明37・2—

○今回は三十六名について述べた。残った土屋文明から依田秋圃までの三十四名については（下）として次号に回すこととする。

（本学教授）